
DQD～ドラクエダンジョン～

ボナンザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DODへドラクエダンジョンへ

【Zコード】

Z6210Z

【作者名】

ボナンザ

【あらすじ】

目が覚めたら記憶を失い、ドラクエの世界にいた主人公。しかし、その世界はいろんなドラクエシリーズがごっちゃになつた、ダンジョン探索が広く知られる世界だった。主人公は己の特殊能力を駆使し、世界中のダンジョンの制覇に挑む。そして様々な出会い、別れ、探索を繰り返していく冒険譚。

01話 ライフコッドとF級ダンジョン その1

「大丈夫！？ 君、大丈夫！？」

必死に叫ぶ、女人の声が聞こえる。
しかし返事をすることができなかつた。
体中の力が抜けて、指一本動かない。
何よりただひたすら、眠たかつた。
次第に目の前が暗くなつた。

チュンチュンチュン。

雀の鳴き声と、眩しい太陽の光を浴びて、俺は目を覚ました。

「あれ、ここは？」

辺りを見渡すと、そこは見慣れない家の中だつた。
木造建築の小さな部屋。

壁には小物入れのような袋が掛けられ、ガラスなどない外倒しの
小さな窓がちょこんと付いている。

ロッジ、というよりは小屋のような印象だ。

すると何やら美味しそうな匂いが鼻をつづいてきた。

そう言えば腹ペコである。

俺はゆっくりと体を起こす。

そして匂いのする方へ、足を向けた。

壁に手を当て、扉えない部屋の隅から覗いてみれば、そこには

釜戸に鍋を載せ、ふんふんと鼻歌を奏でる少女がいる。

しかしそれは、なんとも奇妙な光景だつた。

俺は咄嗟に身を隠した。

ちょっと見たことが信じられなかつたのだ。

いろんな意味で常識がぶつ飛んでいた。少女のことも、そしてこの場所のことも。理解の範疇を超えていた。

その理由としてまず一つ。

少女の髪が青かつた。

青いのである。透き通るような、夏の空の色を思い浮かべればいい。あの青だ。

ありえないではないか。人間の髪の色ではない。

いや、もちろん染めている、という可能性はある。

しかし、あの色と艶はどう考えても自前のものとしか思えなかつた。

それが不思議でしかたない。

そして二つ目。

それは釜戸である。

釜戸といつても、ハイテクなものではない。普通に想像する土をかまくら状にして火を炊く、前時代的なあの釜戸だ。

日本にもそりやあキャンプ場なんかではあるだろうが、普通は家中にあるものじゃない。もうガスか電気のコンロに取つて代わっているのが普通である。もし古い家屋にあつたとしても、使うことなんてほとんどないだろう。

しかし彼女は使つていた。

ありえないこと、とまでは言い切れないが、おかしいことだ。

そして三つ目。

それは彼女の服装だ。

Tシャツやジャージ、場合によつてはスーツなんかが普通は着られるだろう。料理をしているんなら、エプロンだつて考えられる。

しかし彼女は、なんというか、非常に古臭い格好をしていたのだ。勘違ひしないで欲しい。ダサい、という意味の古臭いではない。

ここはレトロ、というべきか。

毛皮をそのまま加工したような、化学製品以前のもの。ナイロンなんかとは確実に違う、手織りのようなそんなレトロさ。
民族衣装という感じなのだ。

「……」

俺は考えた。

これは、ドツキリか何かだらうか。

しかしいくら何でも大掛かりすぎるだらう。近年のテレビ局にそんな予算があるとは思えない。

社運を駆けた一大プロジェクトなのかも知れないが、それをこんな一般人にするとは思えない。

(そうだよ、俺みたいなパンジーに……)

そこで俺は気がついた。

あれ、俺って、誰だっけ？

あれ、あれ、あれ？ 俺はなんて名前だつたっけ？

日本生まれなのは確かである。

記憶にあるのは日本のことばかりなのだから。

政治不信に、平成不況。漫画・アニメ大国に、学歴社会。渋谷スクランブル交差点に、鎌倉東大寺とか金閣寺。国会議事堂に札幌時計台。

こんな風に日本のことによく覚えている。

しかし自分が何者か。どこ出身で、年はいくつ。交友関係に家族構成、そして今までの経歴。その他もうもうが思い出せなくなっているのだ。

自分に関することだけ、ぽっかりと忘れている。

「ええ……」

俺はしゃがみこみ、頭を抱えた。

観光地なんかを覚えていいるんなら、出身校とかを思い出せないか、とも思つたがうまくいかない。

通学路、自分の部屋のインテリア、そして自分の顔。そういうものが、まったく思い出せないのだ。

「えつ、えつ、ええ……？」

無意識に喉の奥から声が出てくる。
困った。まったくわけがわからない。

漠然とした不安が身を襲う。

そして同時に、今俺が着てている服の奇妙さに気がついた。
見たこともない服だったのだ。

さらさらとした肌触りから、もしかして綿ではないかと想像する
が、仕立て方がどう見ても日本のものではないのである。

いや日本以前に、大量生産されたものではなく、手作りだ。
ラベルがついてなく、縫い目の間隔が微妙にバラけているのが証

拠である。

「何だ、この服……」

何故ここにいるのか、ここはどこなのか。

俺は足元がガラガラと崩れるような感覚に襲われた。

ドシン、と音がなる。

臀部に衝撃が響いてくる。

どうやら俺は、いつのまにか尻餅をついていたようだった。
するとパタパタという足音と共に、先ほどの少女が、部屋の角からひょっこりと覗いてきた。

「あ……」

俺は声にならない声を出した。

その少女は、初めて見る顔だった。

しかし可愛い。信じられないくらい可愛い子だった。

セミロングの青髪はさらりと流れ、瞳は大きく鼻は小さい。小動物のような愛くるらしさが、彼女にはある。

彼女はにこりと笑う。

「体の方は、もう大丈夫ですか？」

「えっ、あっ、はい。ダイジョブ、ですけど……」

体の方、などと言わても、特に思い当たるフシはない。
何か怪我でもしていたのだろうか。

彼女はより一層の笑顔になった。

「よかつたあ。ホント、村の外れで倒れていた時はびっくりしちゃいました。あっ、そういうばあ腹空いてますか？」「ご飯もうすぐで出来るんですけど、どうですか？」

「倒れていた？　しかも村の外れ？
何だか知らない情報が次々と出でてくるので、どうしても困惑ってしまう俺である。

しかし体は精神とは別で、単純で正直とでも言つのだろ？
の瞬間、ぐーっと腹の虫がなる。
それを聞いた少女が笑つた。

「ふふっ、じゃあすぐ準備しますね。そこのテーブルに座つて待つてて下さい」

「すいません……」

俺は氣恥ずかしくて、頭を搔いた。

「いえ、そんなの氣にしないで下せ。困ったときはお互い様ですかから」

そうして少女はパタパタと部屋の向こうへと消えて行く。
しかし何かを思いついたように、ひょいと顔を出して、一言だけ言葉を残す。

「あの、私ターニアって言います。氣兼ねなくゆっくりしてくださいさいね」

そうして今度こそ、消えていくターニア。

青髪、村娘、ターニアという名前。

俺はすこしづかり、ドラクエ6の事を思い出す。
主人公の妹として登場したターニアと、何だかかぶることが多いのだ。

しかしこの時は、まだ偶然だとしか思っていなかつた。

というよりも現状が理解できず、そんなことは想像もできないといふのが本当のところだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6210z/>

DQD～ドラクエダンジョン～

2011年12月20日21時46分発行